

石油消費の中心はOECDから非OECDへ

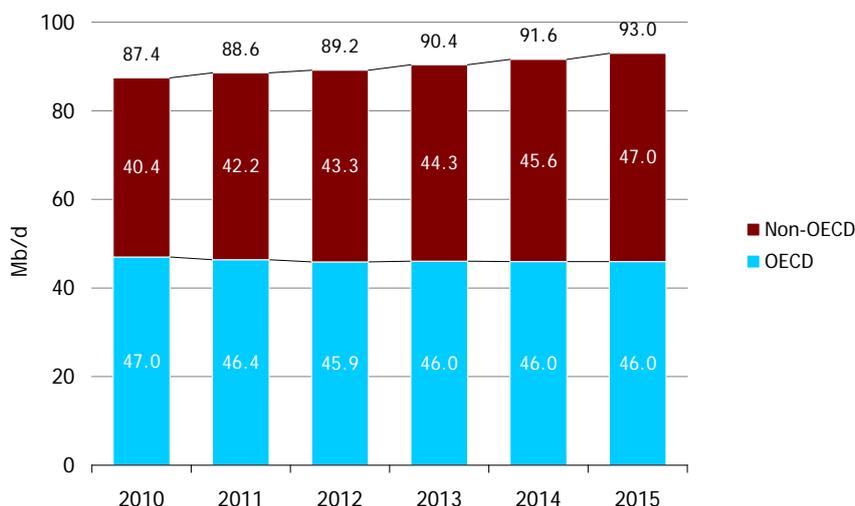
計量分析ユニット 需給分析・予測グループ
研究主幹 グループマネージャー 柳澤 明

米国エネルギー省・エネルギー情報局の“Short-Term Energy Outlook” (2014年1月)によると、世界の液体燃料¹消費は、2013年に初めて日量90百万バレル(Mb/d)を超えた(図1)。2014年にはさらに1.2 Mb/d増え、91.6 Mb/dに達する見通しである。この伸びは非OECD諸国の増加(1.3 Mb/d)によるものであり、一方でOECD諸国の石油消費は引き続き減少する。その結果、2014年の消費はOECDの46.0 Mb/dに対し非OECDは45.6 Mb/dとなり、その差はわずか0.4 Mb/dまで縮まる。

翌2015年は、OECDが横ばいの46.0 Mb/dにとどまるのに対し非OECDは47.0 Mb/dまで増加し、年次ベースで初めて逆転する。日本の原子力発電再稼働のペース次第では、石油火力発電用需要の早期減少により、OECDと非OECDの逆転の時期はさらに早まることになるかもしれない。

なお、国際エネルギー機関の“Oil Market Report” (2014年1月)では、2014年の消費はOECDの45.9 Mb/dに対し非OECDは46.5 Mb/dと見通しており、逆転は2014年第2四半期に起こるとしている。

図1 液体燃料消費

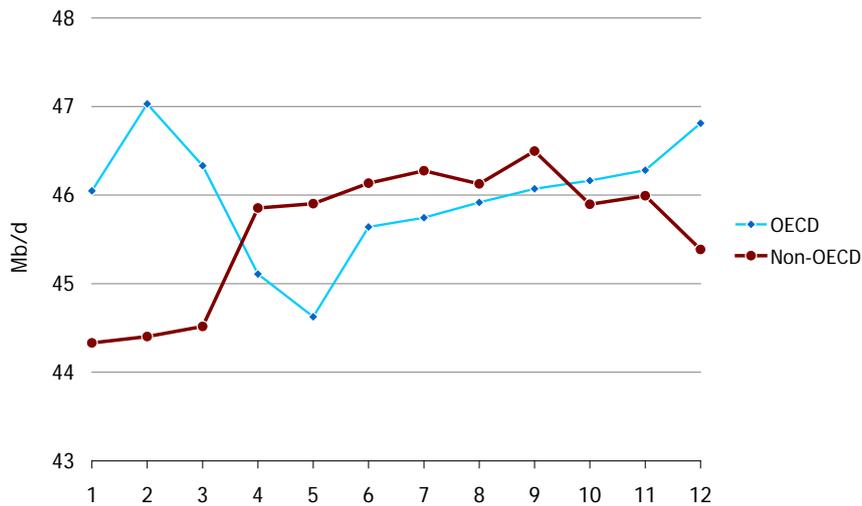


出所: 米国エネルギー情報局“Short-Term Energy Outlook” (2014年1月)

¹ 石油のほか、液体バイオ燃料などを含む

過去のShort-Term Energy Outlookでは、2013年も4月だけは非OECDの消費がOECDを上回るとの見通しが公表されたこともあったが、現実にはそうはならなかった。しかしながら、2014年は、通年ではわずかにOECDの方が多いものの、多くのOECD諸国で暖房需要が減る北半球の春～秋季の6か月にわたって非OECDがOECDを上回る見通しとなっている(図2)。経済動向や気温の推移によっては、通年でも2014年に逆転が起こるかもしれないような状況である。

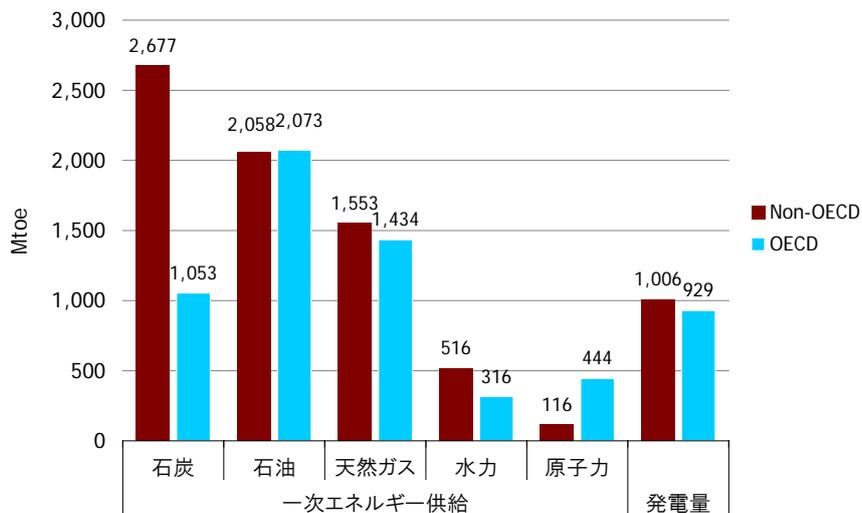
図2 月別液体燃料消費(2014年)



出所: 米国エネルギー情報局“Short-Term Energy Outlook” (2014年1月)

BP “Statistical Review of World Energy 2013”によれば、エネルギー消費量合計では、既に2008年に非OECDがOECDを超過している。同年の天然ガスに続き、液体燃料で非OECDがOECDを上回れば、原子力を除く全ての主要エネルギーにおいて非OECDの消費がOECDより多くなる(図3)。

図3 一次エネルギー供給と発電量(2012年)

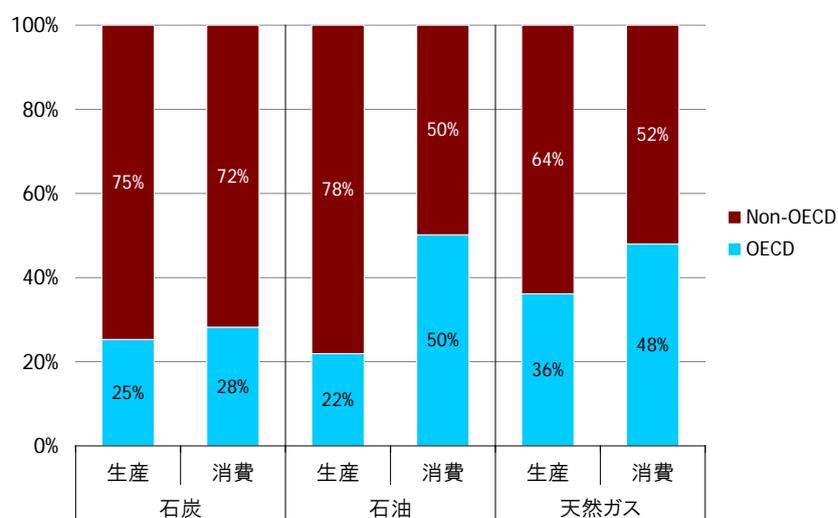


出所: BP “Statistical Review of World Energy 2013”

なお、発電量においても、中国の発電量が米国を抜き世界一になった2011年に非OECDがOECDを超えている。エネルギー起源二酸化炭素排出が逆転したのは、さらに早い2006年であった。

非OECDは化石燃料の生産において既に過半を占めているが、今後は消費においてもOECDを上回ることになる(図4)。すなわち、非OECDがますます国際エネルギー市場に大きな影響を及ぼしてゆくことになる。エネルギーの供給を海外からの輸入に全面的に依存する日本にとっては、エネルギー安全保障を考えるにあたり、非OECD諸国との連携・協調が他のOECD諸国よりも一層重要となつてこよう。

図4 エネルギー生産と消費シェア(2012年)



出所: BP “Statistical Review of World Energy 2013”

お問い合わせ : report@tky.iecej.or.jp